

「宇治橋断碑」を訪ねて

蕨 由美

1 はじめに

宇治橋断碑という日本三古碑（多賀城碑，那須国造碑，多胡碑）よりも古い古碑があるということを知ったのは、3年がかりで三古碑を訪ね歩いていた1994年の夏のことでした。群馬県立博の「日本三古碑は語る」という企画展で求めた図録の古碑一覧表に、「宇治橋断碑 造立・紀年=大化2(646)?年 種類=架橋碑 寛政3年(1791)ごろ 1/3の頭部を発見」と簡単に記されていました。私は、もしかしたら日本最古の古碑かも知れないこの碑を見たくて、今年(1996)1月宇治を訪ねました。

2 宇治橋の守りの寺・放生院橋寺を訪ねて

開門と同時に、まだ観光客のいない平等院を見学し、塔の島から宇治上神社を回り、仏塔山に登って禅寺興聖寺に下り、川辺を歩いて最後に宇治橋のたもとの放生院橋寺に入りました。

小さな山門から階段を登ると、茅葺きの茶室があり、その奥のきれいに手入れされた庭に、宇治橋断碑はありました。すぐはずせる竹の棒一本、それ以外何の囲いもなく、数寄屋風の覆い屋根を設けただけで、庭園の風景にしっかりととけこんでいるのが印象的でした。



宇治橋断碑

本堂は、室町時代の書院造りで、濡れ縁に拝観希望者用の呼び鈴があります。本当にきれいでこじんまりした静かなお寺です。ベルを押すと若奥様風の方が出て来られ、拝観料をお払いすると寺の縁起と断碑など文化財の解説を記した紙をくださいました。

「ごゆっくりどうぞ」とのみ言いおかれ、畳の書院の中にまた静寂な空間が広がってきます。

寺伝によれば、橋寺は604年、ここ宇治の津に聖徳太子の発願により地藏院が建てられ、大化2年(646)僧道登によって宇治橋が初めて架けられてからは、以来宗教的にも社会的にも橋の守り寺であったといえます。「ちはやぶる宇治の渡り」と詠われた宇治の地

は、古代から交通の要衝である故に、保元平治の乱の橋合戦のように戦火にさらされることも多く、また、宇治橋はたびたびの洪水に流されても財政の余裕がなければ放置される運命にありました。

この寺も、各時代の変わり目に荒廃しつつ再興を繰り返してきたといえます。

本堂には、太子ゆかりの地藏尊を、鎌倉時代の中興の祖叡尊が再彫したという本尊地藏菩薩像が、見事な彩色を今なお保ってすっきりと立っていました。また、本尊の後ろには、平安後期の不動明王像、室町末期の清涼寺式釈迦如来像が並んで祀られていて、一つ一つ間近で拝観できます。

本堂の見学を済ませ、今度は庭へ出て「宇治橋断碑」を見ることにしました。寺の断碑解説の紙に「断碑は日本三古碑の一つ」であり、ほかに多賀城碑と多胡碑の名が記されていました。ところ変わればベストスリーの中身も変わるようで、大変興味深く思いました。

3 宇治橋断碑とその背景

断碑は、寛政3年(1791)4月、橋寺の石垣から発見されました。そのころ、橋は30年前の宝暦6年(1756)の大洪水で流された後、仮橋のまま放置されていました。そして、この断碑発見のニュースは、時の老中松平定信をして、極めて財政困難な中にもかかわらず、粗末な土橋ではなく、軍記や絵巻に見られるような立派な板橋に架け替える決意のきっかけになったといえます。事実、その年の6月江戸普請方の役人が現地を検分し、翌年入札の触れが出され、寛政5年5月ようやく完成しました。

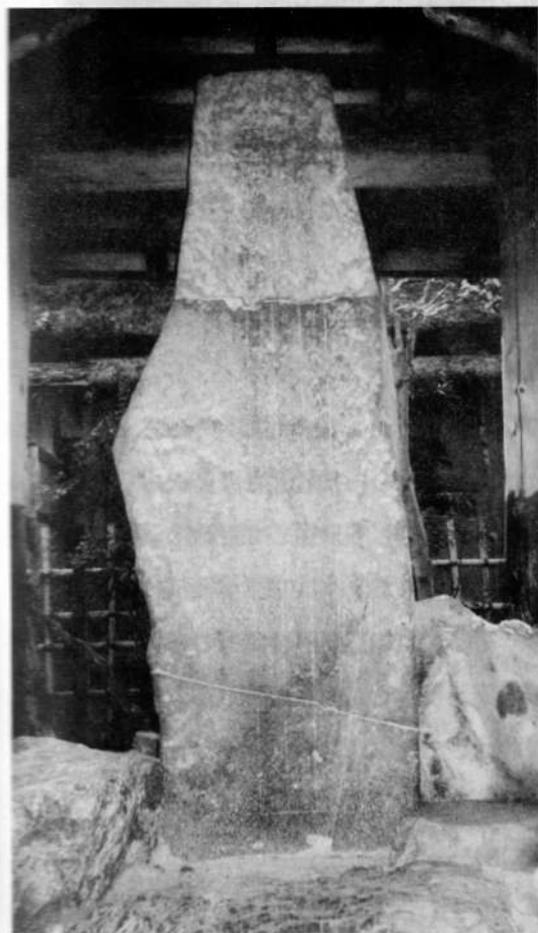
見つかった碑の1/3の頭部には、六朝風の書体で、次のように彫られていました。

洸洸横流 其疾如箭 修 (以下破損)

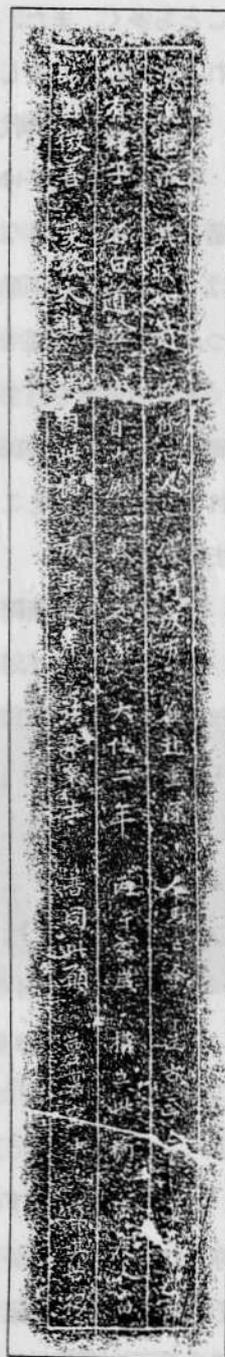
世有积子 名曰道登 出 ”

即因微善 爰発大願 結 ”

そして、残りの下の部分を探したが、発見にいたらず、この故に、「宇治橋断碑」と称されました。しかし、この碑の存在は、14世紀に編集された歴史書『帝王編年記』にその全銘文と共に記されていたので、小林亮適ら尾張の文人グループによって下の部分も補修復元され、寛政5年に今の形で建てられました。その発見と復元のいきさつは、断碑の裏面に追刻されていました。補修する下部の字体も、頭部に残された昔の字体に揃えようとしたのですが、古い書体をよく書ける人がいないので「古法帖」から一字



洩洩橫流	其疾如箭	修修征人	停騎成市	欲赴重深	人馬亡命	從古至今	莫知航葦
世有積子	名曰道登	出自山尻	惠滿之家	大化二年	丙午之歲	構立此橋	濟度人畜
即因微善	爰發大願	結因此橋	成果彼岸	法界衆生	普同此願	夢裏空中	導其苦緣



宇治橋断碑拓本 宇治市歴史資料館蔵

宇治橋断碑銘文の拓本。碑文は、4字8句を1行に刻され、第一行に宇治川の様子、第二行に道登による架橋の事跡、第三行で架橋の仏教的な意義を述べている。上部の当初部の書風は中国六朝時代の影響がみられ、上代書道史の資料として貴重なもの。



菟道橋碑毀廢埋没、不知其幾百載矣、寛政辛亥夏四月、一夫
 偶穿放生院藩籬側、獲斷碑二尺許、驗之、則旧碑四之一耳、
 尾張人小林亮適、内田宣経、小川雅直、吉田重英、釈亮恵、乞得之、意欲復之、而
 碑面文字極醇古、非今人所能補、不得已、就古法帖中、撮拾布列、旧文再全、
 既求貞石、表而樹之、仍勒其文、以顯登法師之功德於千載之後、茲結因
 縁、且俾大庇永世不忘、寛政癸丑秋九月碑成、因係其事以示不朽

尾張 中邨維禎撰
 小林亮適書并督工

宇治橋断碑追刻銘拓本

宇治市歴史資料館蔵

宇治橋断碑の裏に追刻された、復原の由来を記した銘文の拓本。断碑は、寛政3年(1791)に橋寺境内で発見され、同5年(1793)に小林亮適ら尾張の文人グループにより復原建立された。

一字綴り合わせるようにして復元したという苦心談も書かれています。

また、この断碑については、文政4年(1821)狩谷掖斉により「古京遺文」に考証も付して紹介されました。

ところで、4字8句3行からなる全碑文の内容は、1行目で宇治川の急流の激しさとそれにはばまれた人々の苦しみ、2行目で道登が大化2年に架橋をして人畜が救われたこと、3行目でこの橋と因を結びさらに人々を彼岸に導くことの意義からなっていました。残念ながらこの碑を建てた人の名とその年については謙虚にも記載がありません。ただ、別の歴史書「続日本紀」巻一では、僧道昭(629-700)の事跡として「宇治橋創造」のことが記されています。

狩谷掖斉は、この碑の大化2年道登による架橋を正しいとし、「続日本紀」の道昭による初架橋を誤りとしてしまいましたが、どちらが正しいのかは、古来から疑問とされてきました。このことは深く追及すると、701年の大宝令以前には年号よりも干支を使うのが通例であり、「日本書紀」のいう「大化改元」はなかったという最近の古代史の学説ともぶつかる難題になっています。事実、最近掘り出された当時の木簡や土器に元号の記載はなくすべて干支のみであるといい、この点に起因して断碑偽作説も浮上しています。

しかし、壬申の乱(672)には、近江王朝が「菟道うじの守橋者はしもり」に軍事上の指示を与えたとの記述があり、7世紀後半に既に宇治橋があったことは確かです。

また、断碑の記す道登は、大化2年(646)ころ既に有数の高僧であり、他方、「続日本紀」の道昭は、「道登初架橋」のころより20年後に活躍した道登と同じ元興寺の僧であり、井戸掘りや架橋などの社会事業を広く行っていたと記されています。

私は、大宝令以前にまだ制度として年号の使用が法制化される前の時点であっても、中国風の銘文の格調を整え、国家サイドの権威を示すためにも、碑文に「大化」の元号をあえて使用したのであろうと思います。

いずれにしても、律令制国家の大プロジェクトに強い力を発揮した元興寺の組織としての業績であり、また、十数年後には橋の架け替えも必要であったと思われることから道登による初架橋と道昭による再架橋という説も考え得るし、また、道昭によって当時民衆に広く伝わっていた道登初架橋についての顕彰が行われたという説ももっともに思われます。

私は、どの古碑にもいわれる偽作説について、偽作する妥当な理由がない限り、安易

に偽作と決めつけることはできないと考へます。この宇治橋初架橋の記念碑は、大化2年(646)から7世紀後半には確実に存在し、そして、この碑の優れた銘文や書体の価値や、初架橋の歴史的な重みゆえに、国書にも記載され、長い空白の後、近世において再び脚光を浴びることとなったのであると思へます。

断碑の背景には、律令国家の威信と、また、それと一体であった古代仏教の果たした役割がありました。しかし、長い断絶と忘却の後に、近世の文人達の心をとらえたものは、優れた銘文と書体はもとより、寛政5年の追刻にも記されているように、道登の功徳を忘れずにいた人々の心と宗教的な縁を結ぶ「橋」というものの不思議な象徴性であったと感じました。

4 おわりに

今年(1996)8月、再び宇治を訪ねました。この春60年ぶりの架け替へで完工なった平成の宇治橋を渡り、橋寺に着くと、橋を通る車の喧噪とは無縁の静けさ、そして美しい地蔵像が今度も待っていてくれました。そして今回は、案内して下さった若奥様風の方と茶庭の手入れをしていた奥様のお二人にお話を聞くことができました。

かつて、寺領300石を賜ったという寺域は大変広く、橋の管理をすべて任される古刹でした。各時代の節目には兵火などの被害を受けたけれども、明治維新の廃仏毀釈はその最たるものであったとのこと。そして、最近の開発が一層景観上の被害を大きくしていると、深く嘆かれていらっしゃいました。

かつては、高台のこの寺の茶亭から対岸の平等院が望まれ、東の山から登る月が塔の島にかかって眺められたといひます。それが、風致地区外である川沿いに3階建ての建物が建てられた昨今、長く人々に愛でられてきた宇治川の風雅な景色もだいなしになってしまい、また、参拝客のマナーも悪くなって、位牌堂の仏像の一部が持ち去られたこともあるといひます。あえて無防備の状態、本尊や断碑を親しく見てもらっているけれども、これでよいのかと考へてしまうこともあるということでした。

橋寺を後にしてから塔の島を巡り、この橋寺の再興の祖叡尊が建立した十三重石塔を見学しました。

そして翌日、叡尊の足跡を知るべく、奈良の法華寺と西大寺を訪ねました。

律令制の衰退とともに、古代国家の創建した官寺の末路は、物心両面で無残でありました。鎌倉時代になって、仏教の刷新を掲げ民衆に布教した僧の一人、叡尊の功徳は高

く、西大寺を拠点に多くの南都の寺院が新しい戒律のもとに復興したといえます。東大寺と並ぶ官寺西大寺そして総国分尼寺の法華寺も叡尊の新しい息吹によって再興した寺です。

そして、弘安9年(1286)、叡尊は、殺生禁断の実行とともに、宇治橋の再架橋の大事業も成し遂げました。このとき叡尊は80歳の高齢で、再架橋の事業へのためらいがありました。ある僧が「道登ら南都の僧による架橋の故事を引いて尽力を要請した」というエピソードが残っています。

宇治橋は、古代には国家と仏教によって、中世には新しい民衆仏教によって架橋されましたが、それは何時の世も大変な大事業でした。その後も架橋に挑む人々の原点には近世の松平定信のエピソードにもあるように、宇治橋断碑の存在と碑に刻まれた銘文の思想が深く時代を貫いてきました。

平成の新橋には、木の香も新しい欄干に寛永の架橋のときと同じ擬宝珠、そして古式に則した「三の間」がついています。とはいえ、片側2車線の車本位の新橋にも、初架橋の道登の心は受け継がれていくのでしょうか。橋を行く人は知らずとも、寛政の文人達が再建した宇治橋断碑と叡尊が再彫した橋寺の地藏像は、いつまでも橋の往来を見守り続けていくことと思います。



平成の新宇治橋

参考文献

『宇治橋—その歴史と美と—』 宇治市歴史資料館

『宇治橋—歴史と地理のかけはし—』 宇治市教育委員会